

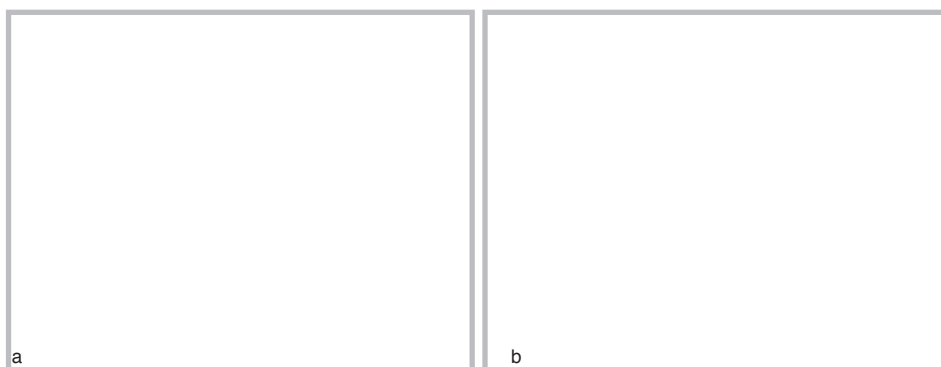


図18.17② 環状肉芽腫 (granuloma annulare)
a：穿孔型環状肉芽腫. b：皮下型環状肉芽腫.

治療

自然治癒しやすく，皮膚生検後にその病変部位が退縮することも多い．局所治療としてはステロイド外用，PUVA療法，凍結療法など．糖尿病を合併している場合はその治療を行う．

3. 環状弾性線維融解性巨細胞肉芽腫 annular elastolytic giant cell granuloma；AEGCG

同義語：光線性肉芽腫 (actinic granuloma)，エラストファジック巨細胞性肉芽腫 (elastophagic giant cell granuloma)

変性した弾性線維（日光性弾力線維症）を貪食する巨細胞が中心となった肉芽腫性病変である．中年女性に好発し，辺縁が隆起し中央が脱色した大型の環状局面として，顔面や頸部，四肢など露出部に出現する（図18.19）．あたかも環状紅斑のようにみえることがある．自然消退することが多い．環状肉芽腫の亜型とする考え方が有力である．

4. Melkersson-Rosenthal 症候群 Melkersson-Rosenthal syndrome

類義語：肉芽腫性口唇炎 (cheilitis granulomatosa)

症状

20歳代に好発し，口唇の腫脹，皸裂舌，顔面神経麻痺を3主徴とする．上記すべてが出現するものを Melkersson-Rosenthal 症候群というが，口唇の腫脹のみを訴える症例も多く，肉芽腫性口唇炎という．

口唇の腫脹：口唇（とくに上口唇）の突然の腫脹がみられる（図18.20）．頬粘膜の腫脹を伴うこともある．これらの腫脹に疼痛などの自覚症状はなく，数時間から数日間持続する．再発を繰

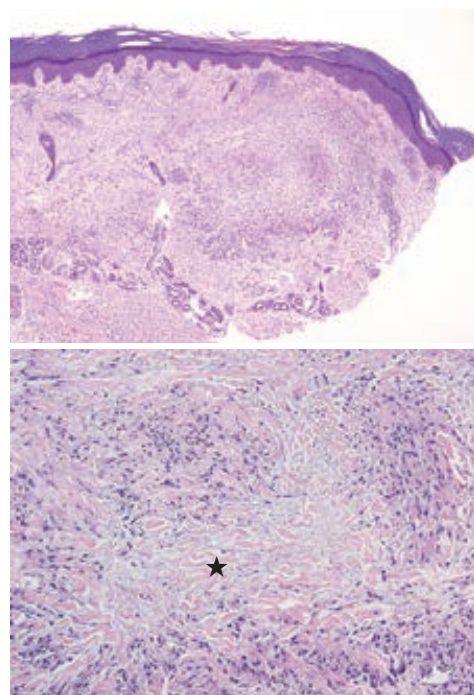


図18.18 環状肉芽腫の病理組織像
中心部に変性した膠原線維とムチン沈着を認め（★印），その周囲に柵状の類上皮細胞肉芽腫を認める．



図 18.19 環状弾性線維融解性巨細胞肉芽腫
(annular elastolytic giant cell granuloma)

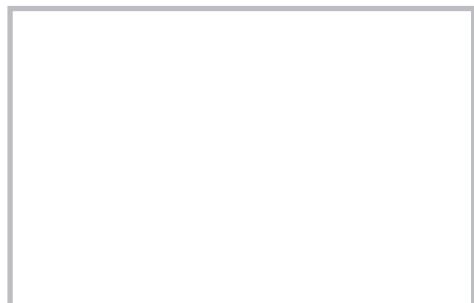
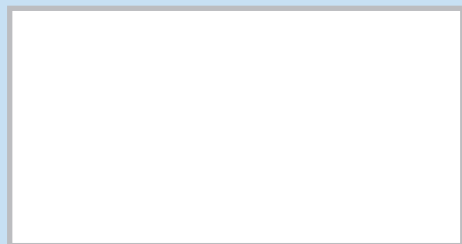


図 18.20 肉芽腫性口唇炎 (cheilitis granulomatosa)

肉芽腫性眼瞼炎 (blepharitis granulomatosa)

MEMO



り返しながら，次第にゴム様の硬さに変化し腫脹が持続するようになる。

皺襞舌：口唇の腫脹と同時に舌も腫大し，表面の皺襞が著明となる。

顔面神経麻痺：頬部の腫脹に先行あるいは同時に，突然片側の末梢性顔面神経麻痺をきたす。再発と寛解を繰り返すうちに症状が固定する。

病因・病理所見

病因は明らかではないが，歯科金属アレルギー，サルコイド反応などが示唆されている。病理組織学的には，初期では真皮全層のリンパ浮腫とリンパ球，組織球浸潤が認められる。慢性期ではリンパ球，類上皮細胞，Langhans 型巨細胞からなる肉芽腫性病変を示す。

治療

対症療法的に抗ヒスタミン薬内服，ステロイド内服ないし局所注射が行われる。

5. 乳児殿部肉芽腫 granuloma gluteale infantum

乳児のおむつ接触部位（肛門周囲～殿部が多い）に一致して，類円形で 1～4 cm 大までの比較的硬い扁平隆起性，紅褐色の結節が多発する。ときにびらん，潰瘍を伴う。おむつを使用する高齢者にも出現する。糞便，尿，カンジダ感染などの慢性的な外的刺激によって発症すると考えられている。病理組織学的には，表皮肥厚と真皮内への多彩な細胞浸潤が認められる。刺激物の除去により数か月で自然消退する。